

# 陽気だより

養徳社 検索

ホームページからご覧いただけます

No. 32 2009.11.15

第4号(24年8月号)から

『陽気』は、昭和24年4月の創刊、今年は60年の年です。過去の記事から、その歩みの一端を振り返っていきます。

## 男の責任

安野 私には近ごろの若い人達

には非常にしつけがないと思います。例えば便所の中へ、草履をぬぎつ放してきたり、却って男の方がそろえてぬいでくるのに、女はそのままぬいでくる。そういうことは実にたくさんあります。

永尾 無作法

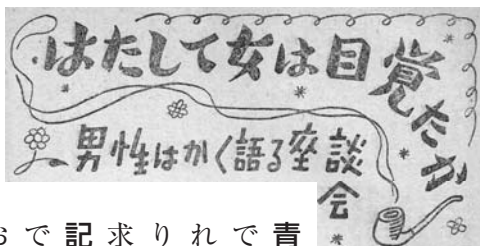
にすることがのびのびしているように思っているのですよ。自由をはき違えているのですね。

深谷 男と肩を並べようと

するのを間違えて考えているのですね。法律的には男と対等でもやはり女性には自ら行くべき道が違いうわけですからね。

永尾 男女同権だからとい

て、男の悪いところまで真似ることはない、女性の本質を忘れたのでは行きすぎですね。



しかし、一般に近頃の女性はみなみずみずしくなった気はしませんか？

深谷 それはありますね。確かにきれいになった。しかしこれをいかに持って行くか、それが問題ですね。古いしつけの型をつぶしたけれど、それに代わるべきものをまだ持っていない。

### 出席者(敬称略)

中山慶一 安野倭夫  
永尾廣海 深谷忠政  
奥田愛子 今川あき子  
本誌記者 青山うた

青山 それはおっしゃる通り

ですが、しかし、今は解放されて生き生きとしてきたばかりですから、そんなに急に要求されるのは、無理ですよ。

記者 中山先生、教校あたり

で特に手に負えんというのはおりませんか。

中山 おりますね、ものの考

え方が、我々に理解できないようなのがいます。自由をはき違えていて、我がままになることが自由だと思っているのです。個性的になることを

我がままと取り違えているのです。口では非常に進歩的な

ことをいつていながら、やることを見ていると単なる我がままなのです。一般に男子の方が物分りがいいですね。当たり前はきついが、よく話してきかせれば、のみ込みが早い。理解力があります。女にはなかなか人の言うことが通じませんね。自分の我がままや感情を弁解ばかりしています。

永尾 そうですね。もう少し

心を広く持って、自己の主張のみでなく、相手の立場をも考え、自らも振り返ってみるような心の使い方がほしいですね。殊に若い人達にほしい

言いたいことだけ言ってそれでよいというのは、ちよつと困ります。ハイハイと機械的なのも困りますが、とにかくもつと理性的になつてほしい

なんです。女はまだ見劣りしますね。(笑い声)

青山 それは認めます。でもそれは今までの環境のためですわ。これからの学校教育や家庭教育などによって、だんだんよくなると思います。

永尾 環境だけじゃない。

青山 本質的に女が劣等だとい

うわけじゃないと思います。これまでの男の人にも責任があると思います。(以下略)

## ブギウギコント

### 女の理屈

妻のお化粧が手間

どつて汽車に間にあわなかった夫、いまいまして、  
「お前の支度があんなに長くなければ間にあったのに」  
妻曰く、  
「そうでしょ。だけどあんたがあんなに急かせさえしなれば、次の汽車をこんな長く待たなくてすんだのに」

母「良子や、これは何？」  
娘「ハイ、手紙です」  
母「そんなことはわかっていました。中は何？」  
娘「中は便箋よ、字が書いてあるわ」  
母「どう書いてあるんです」  
娘「たてに書いてあるわよ」

どつちがどつち  
サラリーマン「課長の奴、俺の気に入らぬことをいいやがるから、あそこを辞めんだ」  
その友「一体どういことをいったんだ」  
サラリーマン「無能だから首だといいいやがったんだ」

### 犬にも劣る

細君「あなた、少しはうちのポチを見習ったらどうですか」  
夫「何？ ポチがそんなにえらいかい？」  
細君「ポチはお酒も煙草のみませんからね」  
夫「うん、全くだ。隣近所でおしやべりもしないからね」



## 明日の米さえない中

『御存命の頃』（道友社刊・高野友治著）には、辻忠作先生の娘いそ姉から聞いた話を元に中山家の様子が、物語風に描かれている。この文章の最後に、高野氏も感激のあまりの創作と断っているが、物語として読んでいただくことをお願いし、以下、要約する。

年の暮れ、庄屋敷村では、中山家だけ、新年の餅つくの音が聞こえなかった。火の気もなく、寒風に裏の竹藪の竹が音を立てる。風のない夜は裏川の音がすかすかに聞こえた。夜はともす油もなかった。元治元年（一八六四）の正月三日も過ぎ、ある夕方、かんさまが米びつのふたをとって見ると、米がほんの少ししか残っていない。底をすくって秤で計ると六合あった。一升の米がなければ家族の人が食べていけなかった。



「お母さん」  
こかんは教祖を呼んだ。「米が六合は、つちやあらへん」「六合は、つちやなけら、六合は、つちや炊いておきや」教祖はそう答えられた。米を手桶に入れたまま、こかんは明日どう食うていこうかと考えた。物足りない寂しさが

あった。考えていると、奥の教祖の部屋から陽気な歌が聞こえてきた。その歌は、「米櫃の米は、かすれても北側の細川の、水は絶えんで」のびのびとしたお声だった。陽気な響きであった。米がなかつたら家の裏を流れる小川の水を飲んで生きていけ、というお言葉だった。たとえ米

櫃に米が無くなると、家の北側の細川の水は滾々と流れて絶えることはない。人間は米のみに頼らんでも、水を飲んでも生きていける。水一滴の中にも無限の神様の恵みがかもっている。いかなる貧困の中にあろうと、神の恩寵は常に変わることなく天地に充ち満ちている。そんな深遠な意味が、この一連のお言葉の中に含まれているのだった。

その翌日、大豆越村の山中忠七先生が、奥さんの身上ご守護のお礼に一升二合の米を重箱に入れて参ったのである。北側の水は絶えん、水飲んで生きていけと強い言葉を出されたが、その下から、すぐ欲しい物は与えて下される親心である。こかんは、その日お詣りに来た辻忠作にこのことを話して、ともに神様のありがたいことに感泣せられた。

「陽気」創刊60年記念出版  
もう読まれましたか

# 人生終らし

じんせいにおわりなし

父 柏木庫治を語る

3人の兄妹によるてい談  
「陽気」掲載記事  
柏木庫治小伝

「陽気」編集部編  
四六判並製・280頁  
定価=1,260円（税込）

図書出版 養徳社  
天理市川原城町388  
☎(0743)62-4503  
http://yotokusha.com/

月刊雑誌 お道の人 創刊60年

# 陽気

『創刊60年定期購読特別割引』  
通常 1年分 2,840円 → **2,400円**  
(税込・送料込)  
※特別割引は平成21年12月末日お申込分までとなります

お申込は 今すぐ!  
〒632-0016 天理市川原城町388  
TEL0743-62-4503 FAX0743-63-8077  
養徳社 陽気定期購読係まで

「陽気」創刊60年記念出版

# 道の八十年

—松村吉太郎自伝—  
天理教の歴史とともに  
生き抜いた信仰軌跡

松村吉太郎 著 定価=1,680円（税込）  
送料200円  
(高安大教会初代会長)

「陽気」創刊60年記念出版

# お道の人のおとておきの話

お道の人のお美しい心象風景 52話  
朝席・夕席に最適です  
定価=1,260円（税込） 送料200円

## 養徳社 よもやま話

○本誌創刊六十年を祝う一年間のキャンペーンもいよいよ終わりに近づいた。お陰で今年は、教外の方々にお会いする機会が多かったが、いずれの方も、『陽気』という雑誌より「養徳社」という社名に驚かれ、なつかしがられた方が多かった。終戦前後、本社名が文壇で注目されていたことがわかった。それは、社員が改めて自社に自信と誇りを持つことにもなる経験にもなった。

○先日の健康診断の結果、胃の内視鏡検査を受ける事になった。検査までの数日、初めての内視鏡という事で周りから苦しみの体験談を聞かされ恐怖と不安で胃が痛んだ。当日、覚悟を決め検査を受けると想像より楽に終了。結果は問題なかったが想像で胃を痛めるとは不甲斐ない。

## 広告を載せませんか

ようぼくの企業や会社の広告を『陽気』誌へ載せてみませんか？ 料金は、記事中で一回二万円から。

詳しくは養徳社広告係まで  
☎0743・62・4503

この「陽気だより」を各支部例会などの折、広く養徳社からのお知らせとしてご利用ください。ますよう、お願い申し上げます。  
養徳社